書　　評

J・A・ジャックソン(編)『人口移動』

J. A. Jackson (ed.), *Migration*, Sociological Studies 2, Cambridge University Press, 1969, London, vii+304 pp.

1. 本書は予定されている5巻の「社会学研究叢書」の第2冊目である．第1冊は "Social Stratification" であり，さらに "Professions and Professionalization", "Role", "Social Change" の刊行が予定されている．新しく書きおろされた論文集である．

2. 本書は10人の寄稿者の諸論文で構成されている．すでに Demography, 3, 1 (1966) に発表された Everett Lee 論文 (A theory of migration) を除くとアメリカ側の寄稿はなく，主として西欧の専門家による西欧およびアフリカの事実についての研究である点に特徴がみられる．

3. 論文の内容は大別すると国際移民，国内移動にわけられる．前者については G. Beijer (Modern patterns of international migratory movements) と C. Price (The study of assimilation) の論文がある．さらに，J. Gugler および J. C. Mitchell のアフリカにおける国内人口移動および都市化の注目すべき研究がある．しかし，本書の中心は次の4氏の国内人口移動に関する研究にあるといってよい．C. Jansen (Some sociological aspects of migration), H. Lind (Internal migration in Britain), R. C. Taylor (Migration and motivation: a study of determinants and types) と A. H. Richmond (Sociology of migration in industrial and post-industrial societies) の研究である．

4. G. Germani の移動要因分析アプローチ—客観的，社会心理的および規範的の3水準による分析—を実地調査に適用して，移動決意過程の動機構造とこれに対応する4個の移動型 —Aspiring, Dislocated, Resultant および Epiphenomenal— 区分を行なった Taylor の研究は示唆に富んでいる．

5. Lind の研究は，経済理論の側から行なわれた唯一のもので注目される．経済理論における人口移動の役割に検討を加えているが，ケインズの地域不均衡モデルを批判し，より現実的な新しい一般的移動モデル—それは多次元科学的研究によってのみ可能—の作製の必要性を強調していることが注目される．

6. Jansen は工業化社会と低開発社会における人口移動の本質的な差異をあきらかにし，後者における非熟練人口の農村から都市への単純な人口移動に対し，前者における人口移動は生活周期と職業経歴パターンと密接な関係にあることを指摘している．

7. Richmond も Jansen と同様近代社会における人口移動と19世紀におけるそれとの差異を指摘している．それは19世紀においては，農村から都市への大量人口の脱出による一方的移動が支配的であったのに対し，近代社会のそれは都市間移動であり，多方向的の移動 (multi-directional) であるとして特徴づけられる．さらに注目すべきは，脱工業化社会における移動人口の特徴についての Richmond の所論である．脱工業化社会における移動人口は，一か所に定住することの少ない "transilient" 型となり，脱近代化社会の社会組織の特徴的な形態である世界的なコミュニケーション網—これを Verbindungsnetzschaft とよんでいる—の中で活動する．脱工業化社会における移動人口のその参加する社会制度に対する連結様式は，"同化" とか "多元的統合" といった次元のものではなく，脱工業化革命に積極的な役割を果す作因者であり，変化過程を促進する触媒機能を遂行するものとして新しい意義をみとめている．

8. 本書の編者である Jackson が "人口の移動は，社会変動の要素であり，かつその触媒である" といっている如く，人口移動はダイナミックな内容をもった社会過程である．その研究は真に multi-disciplinary でなければならない．本書は人口移動の社会学的アプローチに偏しているとはいえ極めて多面的であり，研究のおくれたこの分野における注目すべき貢献であるといえよう．画期的な転換を示しつつある日本の人口移動研究にとってもいくたの示唆をもっている．　　(黒田　俊夫)